泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画「鏡花と能楽」展示報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28172

1．泉鏡花記念館・金沢能楽美術館共同企画展「鏡花と能楽」展示報告

a. 鏡花と能楽（概要）

鏡花の〈能楽もの〉の代表作とされる小説「歌行燈」は、今から約100年前の明治43年（1910）に発表された、鏡花円熟期の作品である。無芸の芸者・お三重が、流派の重鎮である叔父の怒りにふれて斯界を追放された元能楽師・恩地喜多八から神がかりな伝授を受け、「玉之段」（「海人」）を舞うというこの物語は、鏡花の芸術至上主義が最も色濃く表れた作品としても知られているが、その成立の背景として、鏡花の母方が加賀藩御抱の能楽師の家系であったことはやはり無視できない。

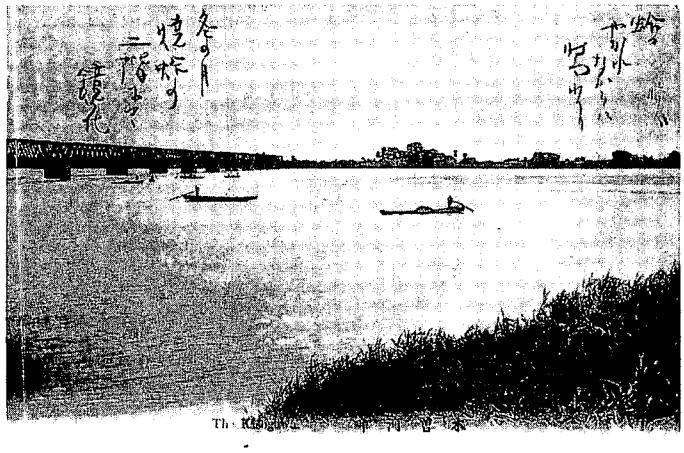
鏡花の郷里・金沢は〈空から謡が降ってくる〉といわれるほど能の盛んな街として知られている。能が武家の式楽として保護された藩政期、各藩がそれぞれの意向に沿う流派の能楽師を抱える中、加賀藩は五代綱紀以降、特に宝生流を重用し、その隆盛により〈加賀宝生〉という言葉が生まれたほどだ。鏡花の母鈴は江戸詰めの加賀藩御手役者で宝生流の大鼓方である葛野流大鼓師・三代中田猪之助（万三郎）の娘であった。中田家は代々猪之助の名で加賀藩御手役者（大鼓師）を世襲した家であったが、幕末の混乱の中、藩より金沢帰還の命を受けた三代猪之助は妻と息子の惣之助夫妻、そして当時13歳であったとみられる娘鈴を伴って帰沢した。その後、猪之助は豊喜、惣之助は孫惣と改名し前田家関係の演能に度々出演、家芸である大鼓師としての活動を続けたものの、明治5年には前田家当主の東京移住とともに元御手役者の扶持が打ち切られる事態となった。これにより多くの元御手役者同様、中田家も窮地に立たされたであろうことは容易に想像される。鈴は既に元加賀藩御細工者・和泉屋庄助の息子で加賀象嵌の彫金師であった泉清次に嫁いでおり、明治6年には泉家の長男鏡太郎、のちの泉鏡花が誕生しているが、鏡太郎懐妊中の鈴が当時、隣県富山の高岡に出稼ぎに出ていた夫清次に宛てた書簡から、主不在の泉家に鈴の両親である猪之助夫妻が身を寄せていたことがわかっている。その後、明治10年に豊喜（猪之助）の長男で鏡花の伯父・中田孫惣（惣之助）が死去、また同14年に豊喜が死去するに至って、大鼓師としての中田家の家芸は絶えた。翌15年には鏡花の母鈴も亡くなり、鏡花の身近にいる中田家の縁者は、夫孫惣の死後、辰口（現石川県能美市）で芸者置屋を営んだとされる妻の中田ちよとその娘たちだけとなったが、彼女たちによって鏡花に能楽に関わる何らかの影響がもたらされたかどうかは現在不明である。

鏡花が再び能の世界と接点を持つのは、明治23年に17歳で作家を目指して上京した後、東京在住と思われる亡き母鈴の姉妹を捜し求める中で偶然対面を果たした伯父・松本金太郎との出会い以降のことである。松本金太郎は鏡花の祖父・中田豊喜（猪之助）の三男だが、中田家が金沢に移住する以前に既に松本家の養子となり、宝生流のシテ方として活躍していた。「歌行燈」が発表された明治40年代は、武家社会の保護を失い、一時衰退した能楽界が苦難の時を乗り越え、新政府の後押しを受け再び興隆期を迎えた時期

にあたる。鏡花と金太郎は明治 34 年には二人で神奈川・静岡方面を 10 日間かけて旅するなどして、親交を深めていた。こうして鏡花は金太郎との交流を通して明治の能楽界の空気によりリアルに接することができたと考えられる。「歌行燈」に代表される鏡花の〈能楽もの〉には、当時の能楽界の状況が作品の随所に見え隠れしており、鏡花が能楽師の流れをくむ者として斯界の動向に敏感に目を向け、作品化していることが見て取れる。

「歌行燈」に描かれた能の世界と伯父・甥の絆のモチーフが、現実の伯父である松本金太郎との関係なくしてはあり得なかったことは以上の通りだが、作品執筆の直接的な契機としては、同作発表の約 1 ヶ月前の明治 42 年 11 月 19 日から 25 日にかけて、鏡花が反自然主義を謳う文芸革新会の関西地方講演のため会のメンバーとともに伊勢・桑名・名古屋などを訪れたことが挙げられる。夫婦岩で知られる名勝・二見ヶ浦や伊勢神宮を巡った後、桑名の老舗・船津屋（「歌行燈」の湊屋のモデル）に宿泊した鏡花は「冬の月 焼蛤の 二階にて」の句を絵葉書に寄せ知人に発信したほか、後に「歌行燈」が『明治大正文学全集』に収録される際には〈月下の霜の桑名新地、真景やや写し得たらむ歟〉という言葉を寄せており、当地の風光がいかに強く鏡花を魅了したかが窺える。「歌行燈」のみならず、鏡花が幼少時に郷里金沢で眼にしたと思われる今様能狂言の女役者と主人公との情愛を描いた「照葉狂言」や、同じく能役者や能の世界を描いた「新通夜物語」「卵塔場の天女」などは、鏡花と能楽のゆかりのためか、鏡花周辺に実在した人物や出来事が素材とされていることが意外に多い。実はこれは〈能楽もの〉に限ったことではないのだが、鏡花作品のそうした一面に〈鏡花と能楽〉というテーマを切り口に迫るとしたら、今、何が見えてくるのか――既知の資料はもちろん、金沢にふんだんに残されていた新たな能楽関連資料や実際に能に携わる人々の経験をもとに改めてたどり直してみようというのが本企画の趣旨である。

（泉鏡花記念館　学芸員　穴倉玉日）



桑名旅行中の鏡花が知人に送った絵はがき（泉鏡花記念館蔵）